

経済体制論争の開幕：シェフレとルロワ-ボーリユー

< 報告要旨 >

森岡 真史 (立命館大学)

ソビエト社会主義体制の出現後、ミーゼスの「社会主義共同体における経済計算」(1920)を端緒として、1920-1930年代に、社会主義経済の機能をめぐる論争が多くの論者によって展開された。この論争は一般に社会主義経済計算論争と呼ばれているが、狭い意味での経済計算の問題にとどまらず、資本主義と社会主義という両体制の構造と機能の比較およびそこから導かれる両体制の優劣が広く論じられたという点からすれば、一連の論争はより広く「経済体制論争」と呼ぶことが適切である。

経済体制論争は、ロシア革命とともに始まったわけではない。エベリング (Ebeling 2003) が明らかにしたように、資本主義との比較の視点からの社会主義の批判的考察は、1870年代から始まっており、それらは市場過程と価格の機能の理解の面で、オーストリア派が発展させた考えの一部を先取りする内容を含んでいた。本稿の課題は、エベリングが発掘した「ミーゼスの忘れられた先行者」たちの諸著作のうち、時期的にもっとも早い A. シェフレの『社会主義の真髓』(初版 1874年)と、P. ルロワ-ボーリユーの『集産主義』(初版 1884年)について紹介と検討をおこない、従来の経済体制論争史における欠落部分を補うことである。シェフレの『真髓』は、社会主義経済の機能可能性に関する基本的問題の設定とその検討への着手という点で、またルロワ-ボーリユーの『集産主義』は、前者が設定した問題の拡張とそれらへの明確な否定的解答の提示という点で、いずれも、経済体制論の嚆矢と呼ぶにふさわしいきわめて先駆的な貢献である。

1. シェフレ『社会主義の真髓』

アルバート・シェフレ (1831-1903) は主に在野で活躍したオーストリアの経済学者・財政学者・社会学者で、方法論的には歴史学派に近く、政治的には自由放任主義と社会主義の双方に反対して、社会政策や労働保護立法の積極的推進を唱えていた。1874年、シェフレは小著『社会主義の真髓』で、マルクスの理論から導かれる新しい社会はいかなるものか、またそれはどのように機能するかという問題を論じた。

(1) 社会主義の概念規定

シェフレは、社会主義の積極的な綱領を明確に述べるという点でのマルクスの戦略的な慎重さにもかかわらず、『資本論』などで展開された資本主義に対する全面的批判から、「社会主義の根本的な理念と目的」を読み取り、社会主義者が「その諸原理の帰結として」必然的に要求する内容を導出することは可能であると論じる (Schäffle 1889: 9-10)。シェフレによれば、「社会主義の綱領の経済的真髓」は、私的資本のシステムを、「社会の全構成員による生産手段の集団的あるいは共同的所有に基づく国民的労働の統一的組織」に置き換えることにあり、この集団的な生産方法は、経済の諸部門を公的管理の下に置くことによって「現在の競争的システムを取り除き」、全員の協働によって生産された共同の生産物を、「各人の社会的労働の量と社会的有用性に基づいて分配する」(3-4)。社会主義の下では、「あらゆる富の生産と分配の手段…はその十全な意味において社会全体の共同財産となる」。したがってそこには、「私的な営業や個人企業は、もはや存在しない」(5)。以上のような、生産手段の私的所有や個々の資本家間の競争を生産手段の共同所有と生産の社会的な管理に置き換えた新たな体制という、当時としては最新の社会主義を、シェフレは「集産主義」と呼び、一方では資本主義と、他方では、協同組合主義者が構想する社会主義と対置する(6, 11)。

(2) 社会主義経済の概要

シェフレによれば、社会主義は、「生産過程を、明確な目的を有する単一の管理の下に結合すること」を要求する (61-62)。したがってそれは「商業と市場の存続を許すことはできない」(69)。投機性を伴う今日の私的商業は、生産手段の私的所有および私的生産者の競争の帰結であり、それらが除去されれば、「売買、競争、市場、価格、貨幣による支払は直ちに余計なものになる」(70)。さらに、利子を生む資本および金融資産市場の全体も消滅し、個人の貯蓄は純粋な消費の繰延としてのみ認められる。生産の管理は商業と市場に代わって、「生産・取引の諸機関を代表する単一の中央当局」に委ねられる (71)。

中央当局がはたすべき役割は、次のようである。(a)中央当局は需要調査のため、諸個人・諸家族の需要を「毎日、毎週、毎月、毎四半期あるいは毎年、統計的に記録」する。(b)需要を充たすよう生産を指示し、「一

つの工場から別の工場への生産物の実際の輸送と、消費者への配送を、経済組織内の中央および中間の貨物集積所を介して組織」する。その際、「生産された個々の財貨が、全ての必要な地域に、各地域の需要を記載した報告書に従って、正しい比率を保って正しい時間に配分されるよう」輸送・収納・保管がなされなければならない(71-72)。社会主義経済は現物経済ではなく、中央当局は、貨幣価格に代えて、生産の「社会的必要労働時間」を評価と計算の単位として利用する(74)。生産物の分配もそれを基準として行われ、各人は社会全体の必要のためにあらかじめ控除される部分を除いて、同種の労働の平均的な生産性に換算された自らの労働の評価に比例する所得を受け取る(84-85)。

(3) 社会主義経済の機能

シェフレがこのように社会主義経済の定式化を行った目的は、「この原理の具体的な諸帰結」を検討するためである(37)。彼は、評価・計算単位としての必要労働時間は、(a)消費と労働に関する自由な選択の保証、(b)経済的誘因の提供、(c)需給均衡の維持、という資本主義における価格の三つの役割を価格にかかわって果たすことができるかという問題を提起した。

消費の自由については、シェフレは、社会主義国家が「有害と思われるものへの需要の全体を、単にそれを生産しないことによって抑え込む権力をもつ」ことの危険性を認めるが、各人の「自由の意識」が高ければ、この危険が現実化する恐れは小さいと考える(44)。彼にとってより重要なのは、生産計画にみあった労働者の配分が労働者による自由な職業や居住地の選択と両立しうるかという問題である。資本主義では賃金の相対的変動が労働者の自発的な移動を誘導する役割をはたしているが、社会的労働時間に基づく労働の評価は、こうした役割を果たすことができない。なぜなら、社会的労働時間に基づく労働の評価は、費用面のみを反映するものであって、需要の強度や需給均衡の維持という観点は含んでいないからである(59)。

シェフレの考えでは、そもそも諸生産物の交換価値は、費用だけに依存するものではなく、「使用価値、すなわち需要の緊急度にも依存している」(86)。それゆえ、社会主義者は労働時間による評価に固執すべきではなく、労働や生産物の一時的な需給関係をも反映するような価値指標を用いるべきである。社会主義当局が価格に相当する指標を費用だけを考慮して決めれば、「需要と供給の間には、商品の種類と数量の両面で、絶望的な、手に負えないほどの規模での乖離が発生する」ことは避けられない(87)。

(4) シェフレの結論

このようにしてシェフレは、社会主義が経済的に成功するためには、社会主義者は価値に関する理解を改め、「現在の〔資本主義的〕市場において価値に影響を及ぼしている全ての要因をしかるべきやり方で模倣」することに努めるべきであると主張した。しかしそれが可能か否かについては、はじめ彼は自分の考えを明言しなかった。そのせいもあって、多くの社会主義者は『真髓』を社会主義の好意的な概説書と受け取って歓迎し、著者シェフレは社会主義者もしくはその同調者であるという誤解も生まれた。

そこでシェフレは1885年に結語を付加して、「われわれの『真髓』は、民主主義的社会主義の擁護論を意図したものではない」ことを強調した。さらに彼は、マルクスによる社会主義の構想は「経済を混沌へ導く実行不可能な計画を表して」おり、社会主義の枠内で資本主義における市場や利潤の機能の部分的模倣をはかることは「社会主義の本来の精神と両立せず、むしろそれを破壊するものであるがゆえに、けっして成功しない」と断じて、自らの本来の立場を明確にした(121-124)。

2. ルロワ-ボーリュ『集産主義』

ポール・ルロワ-ボーリュ(1843-1916)は、18世紀半ばから20世紀初頭にかけてパリを拠点とする経済学者や実務家の一大学派を率いて権勢をふるった人物で、広汎な領域にわたる膨大な著作がある。思想的には、彼はセー以来のフランスの経済学的自由主義の伝統の継承者であり、国家による経済活動への介入と統制を徹底して排撃した(ただし、対外政策、とりわけ植民地政策ではしだいに国家の役割を広く認めるようになった)。彼の財政論・租税論・植民地政策論は、明治中期の日本でさかんに翻訳された。しかし、生前の圧倒的な名声にもかかわらず、ルロワ-ボーリュとその学派の影響力は、彼の死後急激に低下した。

『集産主義』の初版は、『真髓』の出版から10年後の1884年にパリで刊行され、1909年の第5版まで拡張をともなって版を重ねた(英訳の刊行は1908年)。執筆の意図と姿勢は、集産主義あるいは科学的社会主義は「自由と進歩の新たな敵」、しかも「真剣で深い研究に値する」敵であるという序文の言葉に端的に示されている。シェフレとの関係について言えば、彼は『真髓』に多くの点で批判を加えながらも「集産主義社会について明確な観念を与えようとする唯一の試み」として高く評価した(Leroy-Beaulieu 1908: 155)。

(1) 社会主義経済における需要と供給

ルロフ-ボーリューからみて、社会主義国家が生産の需要への適合を自らの任務として引き受けることは、一握りの人間が「数百万の人々の日々の生活と日々の必要に責任を負う」ことを意味し、「傲慢と自信過剰」の極みであるばかりか、途方もなく危険な企てでもある。というのも、この場合、国民の生活は国家機関が「その任務を正確に遂行できるか否かに依存する」ようになり、そこで必然的に生じる誤りは、「私企業によっておかされる誤りとは比べものにならないほど深刻」な事態を引き起こすからである(161, 164)。

資本主義経済では、価格の上昇と下落が、ある商品について（それがどんな原因によって生じたにせよ）「市場に不足があるか過剰生産が生じているか」を広く人々に知らせ、そのことによって「統計という抽象物よりもいっそう迅速でいっそう確実な指標」として機能し、「需要と供給の間の経済的均衡を維持する」役割をはたしている(162, 164, 169)。さらに、社会主義者が非難する利潤は、ルロフ-ボーリューの考えでは「生産物の質と量の適切性に関する唯一の判断基準」であり、過剰生産の発見と是正の導き手である。利潤を全く無視して行われる生産は「きわめて重大な効率性の欠如」を免れない(100)。どんな立派な統計も、こうした機能において価格や利潤に代替することはできない。さらに、社会主義経済に形のうえで価格や利潤を導入しても、問題の解決にはならない。なぜなら、価格や利潤のこうした機能は私的資本、とりわけ私的商業の活動と不可分であるが、社会主義経済ではその私的商業が抑圧・排除されるからである(173)。

ルロフ-ボーリューは、全生産の国家機関への集中は「集産主義体制の下で必要な記帳の規模は恐るべきものに達する」という面でも大きな困難を引き起こすと指摘する(163)。国民経済規模での生産の管理を実行しようとするれば、「およそ思い描くことができないほど巨大」で、いまあるものよりも「はるかに大規模で、いっそう硬直的で、いっそう緩慢な官僚機構」が必要となる。このような機構のもとでは、誤り（それは重大な結果をもたらす）が避けられないだけでなく、「それを是正することもいっそう困難になる」(164)。

(2) 社会主義経済における改善と革新

資本主義において革新を促進する制度的条件としてルロフ-ボーリューが重視するのは、成功から得られる利潤の誘因作用だけでなく、「みずからの相違を試す機会が広く開かれている」という点である。すなわち、新たな事業計画をもつ人は、自らの資金や借入を通じて、自分自身のリスクで自分の構想を試すことができる。この意味で、改善と革新は、「個人的創意、競争、職業選択の自由、私的資本の産物」である(182-185)。これに対して、社会主義体制のもとでは、革新への経済的誘因が弱いという点は別としても、「改良を始め発明を発展させるには、数人を説得するだけでは十分ではない」という問題が存在する。構想を実行に移すためには、革新者は「多数の役人や行政委員会と交渉しなければならない」し、最終的には「全官僚機構の好意を得なければならない」(184)。これは革新の実行を決定的に阻害する。

この点に関わって、ルロフ-ボーリューは、資本主義経済での改善や進歩において企業家-資本家がはたしている積極的役割を社会主義者が十分理解していないことを批判する。資本の所有と投下は、けっしてそれ自体として利潤の獲得を保証する十分な条件ではない。経営の成功のためには、さらに組織、革新、予見、判断などの面での種々の才能や能力が必要である。社会主義体制は、こうした企業家能力が発揮される条件を動機と機会の両面で破壊することによって、改善と革新の源泉を枯渇させる。

(3) 社会主義と自由

ルロフ-ボーリューは、生産手段の私的所有と私的資本間の競争の廃止によって、労働者の独立と自由は、生産決定への実質的関与という点で改善されないだけでなく、むしろ決定的に損なわれると主張する。その理由は、資本主義において雇用者による権力の濫用を抑制する「雇用主間の競争」と雇用主を選択する機会が失われるという点にある(208)。社会主義のもとでは、労働者は「雇用を申し込むべきただ一人の主人として国家を持つ」ことになることにより、労働者は逃げ場のない隷属状態に陥る(209)。

資本主義のもとでは私企業は常に需要を「充足しようと神経を研ぎ澄ましている」が、社会主義の下では立場は逆転し、国家はそれが好ましくないと考える財貨の生産を拒否することができる。ルロフ-ボーリューに考えでは、このように「どの商品が生産されるべきであり、どの商品が生産されるべきでないかを決定する権限をもつ全能の機関」が存在する社会には、国家が特定の価値観を強要する際の「宗派的な熱狂」に対する歯止めが全く欠けており、需要の自由が存立する余地はない(165)。かりに社会主義国家が贅沢を禁止すれば、「衣服は簡素なものへ、日常生活は陰鬱で単調なものへと強制的に逆行」するであろう(166)。このように嗜好の多様性が許容されず、一様な嗜好が押しつけられるところには、「少数者や個人にとっての自由の余地が残されない」(241)。国家は「唯一の印刷業者」「唯一の書店」「芸術作品の唯一の購入者」となるこ

とにより、社会の知的・文化的生活に対しても、「他のどんな政府体制のもとで与えられる権力とも比べものにならない」権力をもち、体制に不満を抱く人々を含めて、「全ての人々の口をふさぎ、屈服させる」(327)。こうして、資本の権力を除去しようとする社会主義者の試みは、かえって、国家権力を握る少数の人々への諸個人の全面的な従属をもたらすとルロワ-ボーリュエは主張する。

(4) 市場・資本主義観

以上にみたルロワ-ボーリュエの社会主義批判の背後には、市場を特定の個人や集団の考案によらない「自生的な進化を遂げてきた」システムとしてとらえる、後のハイエクに通じる独自の市場観がある(88)。彼の考えでは、市場の強みはまさに、「統計や政治経済学について何の知識も持たず、社会全体の福祉など考えたこともない人々」が、価格と利潤を導き手とする私益追求行動を通じて、人々の日々の生活を支える複雑で巨大な経済活動を全体として見事にやり遂げることができるという点にある(157)。多数の個人が中央からの指令を待つことなく、自らの判断で自由に行動しうることは、ルロワ-ボーリュエにとって、市場の本質をなす条件であり私的所有はこの条件の一部を構成する。

個人と社会の関係に関するこのような理解は、一見逆説的であるが、人間は不完全で誤りをおかしやすい存在であり、「人間性が欠陥を全く免れるなどということはない」という、ルロワ-ボーリュエの人間観に根ざしている(25)。諸個人に選択と行動の自由を認める社会だけが、個々の人間が不可避免的にもつ限界を超えて、生産と道徳性の両面で不断の進歩をもたらすことができる、と彼は考えるのである。

3. 評価

シェフレが『社会主義の真髄』で社会主義者自身に代わって定式化した社会主義像は、ロシア革命により現実に社会主義体制が出現するまでの約四十年にわたり、社会主義をめぐる議論の共通の前提となった。また労働時間を評価単位とすることに関するシェフレの考察は、社会主義経済の機能可能性に関する最初の本格的な分析である。ルロワ-ボーリュエの『集産主義』は、シェフレから出発しつつ、社会主義経済のもとでは、価格と利潤のもつ計算・誘導機能が失われ、巨大な官僚機構によって革新の機会が極度に制限され、需要の自由の制度的条件が破壊されるという事態がほとんど避けがたいことを論じて、社会主義経済が社会主義者の期待するように機能するかという問いに、明確に否定的な解答を提示した。

『社会主義の真髄』と『集産主義』をあわせてみれば、それらは資本主義体制との比較における社会主義体制の批判的検討という問題領域を切り開き、しかもこれを一挙に高い到達点にまで導いたと言ってもよい。彼らの議論は、生産技術に際しての価格の役割という問題の考察が欠けている点を除いて、その後の経済体制論争の主要な論点の多くを包括している。80年代後半からさかんになった経済体制論争の再評価は、ミーゼスやハイエクら1920-30年代の論者の復権をもたらしたが、本稿でとりあげたシェフレとルロワ-ボーリュエによる貢献を含め、1870-90年代における議論の本格的な再評価は、今後に残された課題である。

ところで、経済理論および経済思想の見地からすれば、シェフレとルロワ-ボーリュエが立脚しているのは、実は限界革命以前の、広い意味での古典派経済学ならびにこれと結びついた古典的自由主義の伝統である。彼らは、この伝統の枠内にとどまりながら、そこに含まれる諸要素を巧みに織り合わせることによって、社会主義に関する見事な批判的考察を展開した。このことは、古典派の中に、マルクス主義を生み出す種子とならんで、社会主義を克服するうえで鍵となる認識もまた存在していたこと、またその意味で、古典派が幾多の矛盾をはらみながらも、多面的な広がりとおもひなきをもつ体系であったことを示すものであろう。

<参考文献>

Ebeling, R. M. (2003) *Austrian Economics and the Political Economy of Freedom*, London: Edward Elgar.

Leroy-Beaulieu, P. (1908) *Collectivism: A Study of Some of the Leading Social Question of the Day*, translated and abridged by A. Clay, London: John Murray.

Schäffle, A. (1889[1874]) *The Quintessence of Socialism*, London: Sonnenschein.

*本報告の詳細については拙稿「経済体制論争の開幕」『立命館国際研究』第21巻3号(2009年3月)を参照されたい。